

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：11401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16788

研究課題名(和文) 高大接続アウトプット型シャドーイング法の開発

研究課題名(英文) A development of shadowing techniques for output

研究代表者

濱田 陽 (Hamada, Yo)

秋田大学・教育推進総合センター・准教授

研究者番号：00588832

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、リスニング指導法として日本国内で用いられてきたシャドーイングを、高校・大学の授業で使用しやすいアウトプット型指導法として再開発することを目標とした。初めに、いくつかのアウトプット型タスクとシャドーイングを組み合わせて効果を測定したが、思うような効果が出なかったため、新たに、発音記号とシャドーイングを組み合わせたIPA-shadowingとジェスチャーとシャドーイングを組み合わせたHaptic-shadowingを開発した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project was to redevelop a shadowing, which had been used as a listening technique in Japan, as a technique for output in high school and university. First, I conducted experiments to examine the effectiveness of combinations of shadowing and other multiple output-based activities, but outstanding results were not shown. Still, I managed to develop two techniques, IPA-shadowing and Haptic-shadowing.

研究分野：英語教授法

キーワード：シャドーイング リスニング 発音

### 1. 研究開始当初の背景

シャドーイングは、1990年代に日本の英語教育に導入されて以来、効果的に日本人英語学習者のリスニングにおけるボトムアップスキルを高める方法として用いられ、研究がなされてきた。しかし、恩恵を受けるのは、比較的リスニング能力の低い学習者であり、また、リスニングの分野での恩恵が主というのが国内での一般的位置づけであった。つまり、シャドーイングの効果はリスニングのボトムアップスキル向上(特に音声知覚)および主に下位能力者に限定されるという限界が存在していた。すなわち、積極的なコミュニケーション態度の育成と4技能の有機的関連づけが強調される学習指導要領においては、シャドーイングは、その目的を十分に果たすことが出来ず、カリキュラム上の位置づけが定められない。そこで、本研究では、恩恵を受ける学習者層と効果の幅の拡大が可能なシャドーイング法を開発することを企てた。

### 2. 研究の目的

以上の背景から、シャドーイングと理論的に適合するアウトプット中心のタスクを融合させ、理論と実践の整合性の検証を通し、日本人の学習志向に合った、インプットとアウトプットをつなげる技能統合型のシャドーイング法を開発することを目的とした。

### 3. 研究の方法

シャドーイングを、高大接続アウトプット型指導法として再開発するために、初年度は、シャドーイングと理論的適合性のある各タスクの融合による相乗効果を測定し、方法開発を試みた。次年度は、前年度の研究結果をもとに、高大接続として、高校現場での実践研究において、開発した方法の高校での適性を測った。最終年は、その結果を分析し、課題の改善をおこなった上で、新シャドーイング指導法提示およびその外部発信を行った。なお、汎用性をもった指導法開発をするため、多角的・柔軟な視点を意識した。

- (1) 平成27年度は、シャドーイングと各タスク (Dictogloss, Mirroring, 4/3/2 technique, Conversational shadowing) との融合による相乗効果の検証をし、どの組み合わせがどの分野にどの程度効果的かを理論的に分析した上で探索的実験を通して効果的使用法の開発を試みた。
- (2) 平成28年度は、1年目の大学生対象の実践研究を通して開発した方法を、高校現場にて実践し、高大接続の観点からの有効性を探ることであったが、1年目の結果が思わしくなかったため、引き続きシャドーイングと新たなタスクの組み合わせの効果の検証を行い、最後に高校現場での実践を行った。

- (3) 平成29年度は、2年間の実践研究の結果と結果を、理論的に検証し、必要性に応じて最終の実験を行い、理論と実践の整合性を確認したうえで、高大接続技能統合型シャドーイング法の提示をし、外部発信することを試みた。

### 4. 研究成果

#### (1) 平成27年度

シャドーイングと理論的適合性のある4つのタスク (Dictogloss, Mirroring, 4/3/2 technique, Conversational shadowing) との融合による相乗効果の検証をした。しかし、シャドーイングといずれのタスクの組み合わせでも、明確に際立った効果は見られないことが分かった。仮説では、明確な効果が確認されるはずだったが、実際は確認されなかったため、初年度が終わった段階では、積極的に高大接続アウトプット型シャドーイングとして提示できるタスクができなかった。そのため、次年度に引き続き新たな手法を開発する必要性が生じた。

#### (2) 平成28年度

前年度、効果的指導法の開発が予定通り進まなかったため、まず、理論的観点から再検討を行った。その結果、発音とシャドーイングの関係性に焦点を絞ることとした。まず、発音指導においては、発音記号の使用やジェスチャー等を用いて体得的に獲得する方法がシャドーイングとの相性がよいと予想した。そこで、Haptic Teaching (Acton, W., Baker, A. Ann., Burri, M. & Teaman, B., 2013; Burri, M., Baker, A., & Acton, W., 2016 等)を参考に、Haptic-teaching とシャドーイングを組み合わせ、suprasegmental における積極的効果を予測し、検証する事とした。また、通常 shadowing ではスクリプトは使用しないが、使用する音声の発音記号のスクリプトを用いて組み合わせることでの segmental における積極的効果を予測し、検証した。研究の概要を以下に示す。

大学生二クラスを、それぞれ Haptic-shadowing 群(29名)、IPA-Shadowing 群(29名)として、15回トレーニングを行った。前者では、毎回初めに、参加者が各自の部分に強勢が置かれるか等の suprasegmental feature についての自学をし、その後教師と確認したうえで、Haptic-shadowing を複数回行った。後者では、毎回、その日のターゲットとする segmental features を教師が紹介し、その後、使用する題材に関して、各自が発音記号を調べスクリプトを作成し、その後複数回 IPA-Shadowing を行った。

効果の分析は、comprehensibility, segmental features, suprasegmental features の3観点について、5名のノンネイティブスピーカーが6件法で評価した。結果を以下に示す。

| Comprehensibility |      |      |       |      |      |
|-------------------|------|------|-------|------|------|
|                   | 事前   | 事後   | t 値   | P 値  | r    |
| Haptic            | 3.03 | 3.40 | -3.10 | .005 | 0.51 |
| IPA               | 3.24 | 3.53 | -2.68 | .012 | 0.46 |

\*r は効果量

| Segmentals |      |      |       |      |      |
|------------|------|------|-------|------|------|
|            | 事前   | 事後   | t 値   | P 値  | r    |
| Haptic     | 2.68 | 3.03 | -3.83 | .001 | 0.59 |
| IPA        | 2.90 | 3.19 | -3.95 | .001 | 0.61 |

| Suprasegmentals |      |      |       |      |      |
|-----------------|------|------|-------|------|------|
|                 | 事前   | 事後   | t 値   | P 値  | r    |
| Haptic          | 2.19 | 2.48 | -2.79 | .010 | 0.47 |
| IPA             | 2.57 | 2.74 | -2.21 | .036 | 0.39 |

結果より、Haptic-Shadowing は3観点すべてで伸びが確認され、IPA-Shadowing は Comprehensibility と Segmental features で伸びが確認された ( $p < .025$ )。理論上、Haptic-shadowing では、リズムやイントネーション等、suprasegmentals に焦点を当てているため、suprasegmentals が向上し、その結果 comprehensibility も向上したと考えられる。IPA-Shadowing では、segmentals に焦点を置いているため、segmentals が向上し、その結果 comprehensibility も向上したと考えられる。Haptic-shadowing では、比較的事前テストの点数が低かった参加者の segmentals も向上した。

次に、Haptic-shadowing と IPA-Shadowing の印象評定を26項目からなる6件法の質問紙を用いて行った。プロマックス回転の因子分析を行い、各 shadowing とともに4つの因子を検出した。概して、学習者はどちらに対しても好意的な印象を持っているようであった。ただ、二つを比較した結果、構成は異なっており、Haptic-shadowing のみに、favorite, new, deep, slow, cool などの単語が見られ、IPA-shadowing にのみ voluntary や satisfying などの語が挙がった。

さらに、大学生にとってはどちらの方法もある程度の効果が見られ、学習者の認識も良かったが、特に効果的であった Haptic-shadowing について、高大接続としてのテクニックとして使用できるかを確かめるために、高校に出向いて高校生2年生4クラスに対し、実践を行った。その結果、大学生と同じような雰囲気を取り組む姿勢・雰囲気が見られ、どちらの学習者に対しても使用できると感じた。

### (3) 平成29年度

平成29年度の目的は、高校における実践研究の結果を、理論的に検証し、必要性に応じて最終の実験を行い、理論と実践の整合性を確認し、研究をまとめ外部発信することであった。研究のまとめをしている過程で、さらなる課題を発見した。本研究では、アウトプット型のシャドーイングの開発を試みていたが、その際、当然そもそも相手の発話を理解するリスニング力が必要である。しかも、現代では、会話の相手が、ネイティブスピーカーを含め、様々な種類の英語を話す人である。そのため、話者としてはできるだけ分かりやすい発音をする必要があり、聞く者としては、訛りのある英語も理解する力が必要である。そこで、補足課題として、そもそもの発音に対する学習者の認識調査とそれに適応できるシャドーイング法の開発にも取り組んだ。

まず、intelligible pronunciation (分かりやすい発音) に対する重要性に関して、学習者の意識と教える側の意識のギャップを調査した。研究課題は、学生にとって分かりやすい発音のために重要な要素は何か、また教員と認識の差はあるのか、であった。17の segmentals (分節)に関する項目と8つの suprasegmentals (超分節)に関する5件法の25項目の質問紙を142名の大学生に配布し、結果を分析した。その結果、学習者は、主要な分節(l, ɹ, ð, θ, v)、強弱、イントネーションが重要項目であり、第2分節(f, æ, ʌ)はあまり重要と感じていないことが分かった。教員と学習者とのギャップは、概して、予想通り、そもそも教員の方が意識が高い。また、カタカナ英語等の音節レベルにおける第1言語の影響や同化(s<sub>1</sub>, ʃ<sub>1</sub>, t<sub>1</sub>)の部分に大きなギャップが見られた。今後の検討課題となるが、シャドーイングの際に、これらのギャップを埋めていくような指導をアウトプット型シャドーイングとして行うことも面白いと思う。

さらに、ネイティブスピーカーよりもノンネイティブスピーカーの数が勝っているとい現代において、コミュニケーションにおいて、互いに、訛りのある英語を理解しあう必要性に対応するために、補足的に、シャドーイングと訛りについての研究も行った。具体的には、ネイティブスピーカーは、訛りのある英語を一定時間聞くだけでそれに慣れて理解ができるが、ノンネイティブスピーカーも同様か、それともシャドーイングがそれを促進するかを比較した。その結果、シャドーイングの方が訛りのある英語を聞くことに効果的である事が示唆された。

### (4) まとめ

本課題では、従来の、リスニング力向上のためのシャドーイングから、アウトプット型シャドーイングへの変革を目的として取り組んだが、最終的には、アウトプットの中の発音の側面において、効果的なシャドーイン

グ法を開発することができた。さらに、単に効果があるだけでは授業内の活動としては使用しにくいいため、学習者心理も調査した。また、高校生に直接体験してもらうことで、高校での実用性や使用の可能性についても検討した。最後に、コミュニケーションの枠で考えると、発音のアウトプットの技術を高めるだけでなく、学習者の発音に対する意識の把握も重要であるため、調査した。そして、アウトプットの側面とともに、インプットの側面も重要であることから、シャドーイングを用いて訛りのある英語を聞けるようになる可能性も確認した。今後は、多様な英語話者が存在しているという現実性を踏まえ、シャドーイングを用いてその現実に適応する方法を、引き続きインプット・アウトプットの両側面から研究していくことが必要であろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

- (1) Yo Hamada. Shadowing: What Is It? How to Use It? Where Will It Go? 査読有, 2018, RELC Journal
- (2) Yo Hamada. Shadowing for Pronunciation Development: Haptic-Shadowing and IPA-Shadowing. 査読有, The Journal of Asia TEFL, 15 (1), 2018, 167-183
- (3) Yo Hamada. Learners' perceptions of intelligible pronunciation and the gaps between teachers' and learners' perceptions. The Language Teacher. 査読有, 41 (4), 2017, 3-8

[学会発表](計 5 件)

- (1) Yo Hamada. Shadowing practice for listening or speaking. Hawaii TESOL 2018. 2018年2月17日、Tokai International Collage (ホノルル)
- (2) Yo Hamada. Shadowing for pronunciation development: Haptic-shadowing and IPA-shadowing. JALT 2017 international conference, 2017年11月19日、つくば国際会議場
- (3) Yo Hamada. Does Shadowing Help Learners' Perceptual Adaptation To Foreign Accented Speech? 第42回全国英語教育学会, 2017年8月20日、島根大学
- (4) Yo Hamada. Shadowing as a technique for listening and speaking. The Seventh

CLS International Conference CLaSiC  
2016年12月2日, National University  
of Singapore (シンガポール)

- (5) Yo Hamada. Shadowing for Listening and Speaking, a Summary of Research  
第42回全国英語教育学会, 2016年8月20日, 獨協大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

濱田 陽 (Hamada, Yo)

秋田大学・教育推進総合センター・准教授

研究者番号: 00588832